

# 青果物流通◆効率化へ取り組み



フアーマインドのセンターを中継拠点として活用（神戸センター）

## 24年問題 9月末メド対応

全日本ラインは9月末期限にシフトする問題への対応にメドをつける。輸送費の積み込み先やメド、産地の理解に加え、市場や量販店といった荷下ろし先の協力も欠かせないが、中長

### 全日本ライ線

距離輸送を中心に、まずは自社で取り組める領域で、労働時間の総量規制への備えを完了。コンプライアンス（法令順守）の徹底を前提とした適正な運・料金の収受にも努めている。

内産生長 千代田区の名古屋センター（名古屋港区）を経由して、大阪や京都の市場など青果物を届ける路線を4月に開設。更だ、フアーマインドが全国14カ所で開催する青果物の専用セミナーから小売りの店舗に小型車で納品する事を、早ければ今年にも開始する。エリアは東京と千葉・皮切りに、九州、関西へと段階的に広げている。定で、配送業務は協力会社に委託する。

### 中継輸送 親会社の拠点活用

併せて、フアーマインドの神戸センター（神戸市中央区）で一時滞在してから首都圏に向かう。同じく大館センター（秋田県大館市）を経て首都圏に運ぶ便も新たに仕立

てい構想。全国農業共同組合連合会（JA全農）とフアーマインドが各地で股を推進しているPFC（フットフォロイセター）も中継拠点として積極的活用していく。

産地でも地方のJA（農業協同組合）を中心に物流危機への認識が深まってきたことを受け、全日本ライ線はフアーマインドと一体となり、大産地に青果物を供給し続けるために必要な体制の整備を加速させる構えだ。協力会社の更なる連携強化も不可欠の認識に基づき、安全と品質の高度化を図る会議を定期的に催しているほか、帰付車の確保にも努めて

いる。メーカーや倉庫会社に對しては、待機時間の削減や荷下ろし方法の見直しなどを働き掛けている。

同部署取締役は「多くの企業・団体が24年問題について試行錯誤する中、全日本ラインはいち早く19年から解決に向けて取り組んできた。生産者が育てた青果物を適正コストで消費者に届けることを使命と考え、かつては親会社関係だった同他社とも協業することで使命を果たしている。生産者が販機物を適確に販売でき、仕事に見合う手取りを確保できるように、合理的かつ確信を持って各種可能なネットワークを構築し、従業者（ドライバー）の労働環境も守っていく。今後も安定した物流を提供していきたい」と話している。